
12星座の皆様

柁彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12星座の皆様

【Nコード】

N6903H

【作者名】

柁彦

【あらすじ】

どこにでもあるような町、平穏な町。その町の名は88星座町。

と、いつても88星座全てが出てくるわけではなく、その中でポピュラーな12人の星座達が送るほのぼのギャグ風味な恋愛あり、友情ありな日常コメディ（を目標しているお話です）

0 話 ― 登場人物 ―

穏やかで平和な町、どこにでもあるような町。

現代版の桃源郷といえる町。

ここは、88星座町。せいざちょう

88人の名前を持つ星座と名前をもつ星星^{ほしほし}、約多分（誇張）千人が暮らす町。

この話は、その中のポピュラーな12人の日常的な物語です。

0 話 12星座、全員集合

「と、いうことで。なんかいきなり物語を始めるにはややこしいということので人物紹介から始まるそうです。

司会は12人の中で主要キャラになるであろうわたくし、蟹座^{カイ}の蟹が進行させて頂きます」

まるで主要首脳^{サウミノウ}国会議でも開くのではないかと思われる長い机の周りには11人が着席しており、その一角に少女がマイクを持って立っていた。

どちらかという少年的な顔立ちをしており、男と間違われることもしばしば。そのため髪の毛は伸ばしきっているため髪型は整ってはいないがそんなんでも似合う端麗な容姿。

華奢で細い肢体を持っているが、女として色気がないということがコンプレックス気味。

「まず紹介を始める前に私から自己紹介をさせていただきます。
先ほど言ったとおり名前は蟹^{カイ}と申します。16歳、職業はプロゲ

ラマー兼学生です。象徴カラーは銀。この色はわかりやすいように髪色を示しています。好きな数字は「2番」。趣味は家具集めで好きな音楽は外国の歌です。

・はい、こんな感じで次、牡羊座お願いします。

名前。年齢・職業。象徴カラー（髪の色）、好きな数字と趣味。

好きな音楽を言っていて下さい。あとの説明は私がします」

長々しい説明が終わり、指名されたヘッドホン青年、牡羊座が立ち上がる。

「名前は羊一。19歳、取材記者。象徴カラーは赤で、趣味は園芸。好きな数字は「9」。好きな音楽は国家と軍歌」

「・・・国家と軍歌って・・・今時の若者のクセに」

ぽつりと蟹は眩き、早速補足に入る。

「行動派で負けず嫌い。弱者を庇い親切な性格。どこか短気なところもあるが積極的。・・・まあ彼はこの話では単なる短気ボケという扱いになります。

次、牡牛座」

指名されたのは和服の知的長髪男性。見た感じからすでにやんわりとしたオーラがある。

「志牛、25歳でデザイナーです。象徴カラーは緑。好きな数字は「6」で趣味は音楽鑑賞。好きな音楽は弦楽曲ですかね」

「12人の中では最長年でありまとめ役。名前からして中国人に思えますけど違います」

備考をつけたし、説明に入る。

「温厚でのほほんとした人です。意思家堅固であり忍耐力がある性質が在ります。」

・・仲裁担当ですが切れると怖いです。

次、双子座」

次に指名されたのは蟹カイと同年ぐらいの少年。赤い洒落た眼鏡をかけていて、少量だが長い髪をまとめて結ってある髪型。

「双汰そつた、16歳。現役通訳者。象徴カラーはライトグレー。好きな数字は「5」！趣味はパズルで好きな音楽はR & a m p ; B !」
「とにかく元気な子です」

とってつけたような一言を発し、説明に入る。

「好奇心旺盛で臨機応変、機知縦横で、筆舌ともに多角的な知性の持ち主。でも少し優柔不断。

・・・現代っ子のいじられツッコミ担当です」

「え・・・いじられ？」

「・・・・・」

「蟹カイ・・・なんで俺の目みてくんないの？」

「さあ、次いきましよう・獅子座の方ー」

なんとか話しを変えて逸らす蟹カイ。

そんな蟹に助け舟を出すように獅子座が立ち上がる。

左目下にある泣きぼくろがチャームポイントで、端正な容姿をした男性だ。

「獅貴しき、24歳職業俳優。象徴カラーは金で好きな数字はもち1番！趣味はドラマ鑑賞・・で、好きな音楽はミュージカルかな」

「ちゃらい・・・」

ぼそ、と辛辣な台詞を吐いて（以下略）。

「目立ちたがり屋で派手好き。度量が大きく懐が大きい親分肌な性格。」

この話の中では外見とは裏腹に結構真面目なツッコミ担当」

「なんか照れるな」

「でも孤独が嫌いな寂しがり屋さん。まぢ１人で泣くタイプ」

「おい！」

「はい、次乙女座」

こんどはしっかりと無視して続ける司会者。

立ち上がったのは優しい微笑をたたえる女性。艶やかな美とはまた少し違った美しさ放っている。

「乙^{いつる}妻、20歳職業マネージャー。象徴カラーはダークイエロー。

好きな数字は「5」で好きな音楽は宗教音楽です。趣味は読書」

「獅貴のベテランマネージャーです」

補足をつけたし（以下略）。

「中途半端は嫌いな完璧主義者な人です。几帳面で俗物は見下しますが精神はガラスのように脆い可愛い人です。

話の中では姉御って感じでも在り女性の味方ですな。

次・・・・・・天秤座」

次に立ち上がった少年は黙っていれば優雅な雰囲気をもった美少年ともいえる少年。

「天。^{そら} 18歳見習い美容師。象徴カラーは紺色。好きな数字は「6」で趣味は油絵とか描くこと。好きな音楽はピアノ曲」
「外ヅラがいい人です」

本人には聞こえないように呟き（以下略）。

「冷静で人情味がある人です。一方で飽き性でもあり現実主義者。誰にでも好かれる性格をしますが一方で腹黒な部分もあります」
「それ酷くね？」
「ひっ・・・！」
「・・・あんたつているもオレみると悲鳴上げるよな」
「っ、次いきましよう。蠍座」

次に指名されたのは長身でタートルネックを着用している端麗な容姿の男性。

「蠍王、^{かつみ} 22歳精神科医師。象徴カラーは暗赤色。好きな数字は「0」。好きな音楽は明るい曲ならなんでもいいかな？趣味はピ」
「だああああああああ！！放送禁止用語！！やめろ、蠍座の方に謝れ！」

「蠍座つてもとところという星座だよ？」
「でもやめて！一応今は健全にいきたいから！」

心を落ちつかせ、司会者は説明に入る。

「秘密主義でお世辞や作り笑いなどはしない性格。洞察力が鋭い。感情のセーブが苦手なため執念深いし執着が激しい人です。話では主要キャラに入りますね。ボケで」
「執念深いってなんか根暗な性格だなあ」
「まあ合ってるからいいでしょ」

蟹^{カイ}がそう言うと、蠍王は一旦考えて「そうだね」と笑う。それに、蟹は本能的に危険を感じ、あとずさった。だが素早く逞しい腕が腰元に回され、引き寄せられる。

「裏切ったら許さないから」

真つ黒な笑顔を向けられ、色々と危機を感じた蟹^{カイ}は青褪めながら叫んだ。

「次！【副音声：助けてください】射手座！」

「え？やだよ、オレが殺され」

「射手座！【副音声：潰すぞ？】

「・・・はい」

蠍王に殺されるよりまた違った恐怖を感じ射手座が立ち上がった。こちらにも長身で、髪は少し短め。

「弓^{ゆみ}、22歳、職業作家。象徴カラーは紫。好きな数字は「3」、好きな音楽は吹奏曲。趣味は旅行」

「助かった・・・今度プリン奢る」

蠍王から逃げられた蟹^{カイ}は謝礼条件を伝え、説明に入る。

「束縛が嫌いで何事も自由でいたいタイプ。大胆不敵でありながら用心深く神経質な性格でもある。・・・まあこの話ではボケorツッコミの両立キャラ

次、山羊座」

司会者が目を向けたところには、紺色のネコミミフードがついて

いる外套に身を包んだ子供。目元は包帯で覆っており。左目が見えるか見えないかのため容姿はわかりにくく性別不明。ただツツコムとしたら「なんでヤギなのにネコミミフード？」だ。

「キッド。13・弁護士。シンボル・黒。ナンバー「8」。ミュージック、宗廟曲。マイハビ、陶器作り」

「マイハビ、とは私の趣味ということですよ」

解説をした後（以下略）。

「12人の中では一番我慢強く孤独を何とも思わない心の強い子です。興味をもてばとことん追求するタイプ。・・・まあ彼はボケともツツコミともいえません。ただの謎キャラです。

次、水瓶座」

指名されてはとした男性は本を置いて立ち上がる。12人中では一番背が高く、異質な雰囲気がある。

「水祁^{みなぎ}。23歳職業小説家・・・。象徴カラーは灰色。好きな数字は「4」。趣味は天文学や写真関連のこと。好きな音楽はロック、ジャズ」

「意外」

「そうか？」

水祁にひとまず頷きを返し（以下略）。

「博愛主義で規制の価値観による、偏見を嫌悪する性質がある。名誉欲が希薄で鋭い観察眼と、流暢な弁舌力を持っている。水瓶座は自由気ままな楽天的な性格ですが水祁は天然ボケです。蠍座との絡みが多いので主要キャラになるかも

最後、12人目。魚座」

締めというだけあって、蟹^{カイ}もほっと息をついている。

呼ばれた魚座の少女は後頭部に大きなリボンがついており、二つ結び。12人の中では最少年だ。

『氷魚^{ひお}10歳。占い師。シンボルカラーすみれ色。好きな数字「7」。
趣味はうみをみること。好きな音楽は・・・「ブルース」』

自由長に書かれた直筆に蟹^{カイ}はマイクを持ったまま硬直した。

「ひーちゃん」

「う？」

「ブルース好きなんだ」

こくり。

頷く動作すらも可愛い。

「誰だよ！こんな子に育てちゃったの！」

「俺だけど？」

蠍王が拳手。

「ああ、納得いきますね。だってキッド君だって蠍王さんに育てられましたからね」

微笑をたたえる志牛。

「そりゃああんなのに育てられたら変なふうになるわ」

興味なさげな獅貴。

「いいじゃないですか。可愛いんですから」

ポジティブな乙斐。

「氷魚、マイフレンドー」

彼女はわたしの仲間ですと言うキッド。

「お、キッドが変な主張してる。羊一、お前の仲間だぞ」

どこか挑発する天。^{そら}

「お前の方が変人だろ。なあ、双汰っ」

巻き込む羊一。

「ええー・・・どっちもどっちだよ」

巻き添えを食う双汰。

「あれ？水祁サン？」

傍観者だった弓吉。

「寝る。少ししたら起こしてくれ」

相変わらずマイペースな水祁。

こんな形で12人の物語が繰り広げられていく

。

「大丈夫かな・・・」

司会者、早くも不安。

後日談 I N 牡羊座 獅子座 射手座

「獅貴い、飲みにかねえ？会議みたいな終わったし」

「んー、でも羊一今19だろ？だからオレンジジュースな」

「獅貴ってこういうところは真面目だよねえ」

「弓壱が自由すぎンだつて」

「義務教育過ぎたんだぜ？いいだろ？」

「・・・羊一、お前稀に危険な匂いをするな」

「ああ、わかるよ。なんかヤのつく職業の若頭的な」

「・・・」

「・・・（まさか）」

0話　―登場人物―（後書き）

12星座というのをメインとして書いていきたいと思っています。
早いペースでその日のうちに連続か次の日に。遅いときは亀更新と
なります；

星座の性格などにいたっての苦情は受け付けませんが、心が海の
ように広い方は次回もよろしく願いますw；

1話 蟹座 魚座 蠍座の巻き

今日も晴天恵まれた88星座町。せいざちやう

ぐーたら寝ているものもいれば学校に通う者も在り。早朝から仕事に励むものも在り。

そしてこの人は。

「お・・・おなか痛い・・・」

1話 腹痛と共に

銀髪の伸びきった長めの髪を乱し、蟹カイはしんだいの上で膝を縮こまらせ、腹を押さえていた。

額にはじつとりと脂汗が浮き出て、顔色は悪く、青白いといったも過言ではなかった。

そんな時、がちやりとドアノブが回される音と共にこげ茶色の扉が開く。

「蟹カイ ？そろそろ起きなきゃ学校遅れ・・・」

そういいながら仮にも乙女の部屋に入ってきたのは蠍王。かつみ

暗い赤色の頭髪をした白衣姿の男は、網戸を越えてやってきた風にふわりと長めの髪をなびかせながら硬直していた。

「・・・か、かつ、み。おなか痛い・・・」

苦痛から逃れたいためか、蟹はもがき、呻きながら蠍王^{かつみ}の服の裾を掴む。

「うん・・・わかった・・・。それよりまずちよつといい？」

「へ？」

「襲っていいかな？」

「病人相手になにいつてんだよお前は！！！！！」

腹痛など忘れて真顔でそう言ってきた蠍王に顔を真つ赤にしながら蟹は叫んだ。

そう言つと蠍王はちえーと子供のように頬を膨らませながらも病人である少女を労わるように毛布を掛け直し、頭を撫でた。

「痛み止めもらつてくるからとりあえずお腹温めといて？氷魚置いとくから」

どこから出したのか小柄なすみれ色の髪色の少女、氷魚を側にたたせる。

『任せろ』

そして、彼女のスケッチブックには、力強くそう書かれていた。それを見て蟹は自然と笑みを灯し、蠍王も笑みを残して部屋から出て行った。

「面倒を増やしてごめん。ひーちゃんにも、蠍王にも」

『大丈夫。かつみにとって薬をもらつてくることは自分の趣味でも

あるし』

紅茶の入ったティーカップの取っ手を持ちながら少女は優雅にス
ケッチブックを見せる。

「趣味？なんで趣味なんだ？・・・それよりそのティーセットとス
コーンはどこから？！」

『かつみの「貰う」は「強奪」って意味だから。あいつの辞書に「
交渉」という単語は載っていないんだよ』

最後の質問は無視して氷魚はさらさらと字を綴る。

『それよりうざいのが来た』

「うざいの？」

「おっじゃまあゝ」

ばぁん！

魚座の神秘的な潜在能力（？）が見事に当たり、金色の髪を靡か
せた長身男が入ってくる。

「獅貴^{しき}さん・・・？」

「よ。風の噂でなんか具合悪いって聞いてな」

「（情報早いなこいつ）・・・仕事は？」

きりきりと痛むお腹をおさえながらも、獅貴を仰ぎ見る。

獅貴は顎を撫で、「仕事？」と笑う。

「もちろん抜けてきたに決まっ」

「逃がすわけないでしょう？この野郎」

ああああ！！！！ひ、ひ ちゃ・・・！」

だらだらと流血状態の小さな手を見て混乱する蟹。
とにかく止血しなければと手をぎゅっと握った瞬間。

ぶっしゅあああああ！！

尋常ではない赤黒い血が噴出した。

「何で？！おかしすぎるだろ！人間の体の構造として！！」

『ひおは人間じゃないよ。神様だよ』

「なんか血文字で変なこと書いてるし！神様なら自分の血ぐらい止めるよ」

『我に己の体を束縛する権利など・・・もはや・・・無い』

「何馬鹿なこといつちゃってんのこの子！！」

血は自分の顔にも返り血のように降りかかっており、鉄錆のような臭いが鼻孔を刺激した。

「ただいまー。くすねてき・・・」

「か、蠍王・・・！」

血だらけの惨状を見て絶句している蠍王に説明をしようと蟹が口を開口させたが、その前に蠍王が声を発する。

「何？ひーちゃん生理でもきたの？なら今日はお赤飯だね」

「この状況でよくそんなこと言えるな！！あとそいつの発言は控えろ！」

「えゝ・・・。これがないと俺のキャラが成り立たないんだけど」
「そういう事情は出すな！」

キリキリ・・・キリキリキリ。

お腹が痛くて、小さく呻いた蟹は、はつとした。

（この痛み・・・腹痛じゃない・・・）

「あはははははははは！っていうかひーちゃんおもしろすぎ！め
っちゃ血い出てるし！あは、ふはっ・・・はは、げほっ」

最終的にむせる大の大人。

『ツボったみたいだな。でもその前にこの傷どうにかしてよ現役医
者野郎』

冷静に指摘する氷魚だが、まずその前に子供が大出血をしている
のを目の前にして爆笑している目の前の男の異様な性質を突っ込め。

「無理だよ、俺精神科だもん」

ともかく彼を医者と見てる少女の儚い提案はその一言により一蹴
されてしまうが、氷魚はめげない。

『気合でなんとかしろ』

「はいはい。じゃあ・・・こう？・・・あ、悪化しちゃった」

『ぶっっちゃけ痛い。・・・？・・・意識が・・・霞んで・・・』

「ああゝゝやばいね」

蟹は自分の気も知らずボケた会話を繰り広げていく2人をみて、
ついに叫んだ。

「お前等のせいでストレス溜まりまくってるだろうが
！！！！あとすぐに病院行ってこい！！」

絶叫がこだまする町、88星座町。
晴天の空の下にある町は、今日も平和です。

他星座の1コマ

IN 牡羊座 天秤座 山羊座

「ファックユー」

「うわ、いきなりなんてこと言ってくんだコイツ！」

「いいじゃんかよ天。変人同士お似合いだったの」

「んだと羊（みづいち）……。よしキッド、お前からもなんかいつてや
れ」

「……。デメキン」

「（ピシッ）……。上等……。テーマ等土に還してやる。表でろや」

「どっから出したんだよその日本刀！（逃走）」

「アンビリーバボォー（逃走）」

「あ、逃げんじゃねえ！」

1話 蟹座 魚座 蠍座の巻き（後書き）

こんなふうに文が少し（凄く）おかしく話の内容もおかしく進んでいきますw；

文才もなく読みづらいたと思いますが今後も宜しく願いします！

2話 双子座 天秤座 + 蟹座の巻

「・・・あーああああああ」

机に突っ伏して不幸の溜息といってもいいくらい長く暗い吐息を吐く洒落た赤縁眼鏡あかぶちをかけた少年。

一束にまとめてある自分のライトグレーの髪をぶらぶらと揺らす。

「・・・今日、蟹カイの奴やつこなかったなあー」

2話 親友ともと家族の大切さ

放課後。

ついに学校にこなかった友人を思い、双汰そつたははあともう一度溜息をつく。

暁色あかつきいろの夕焼けの空は眩しく、眠気と共に孤独感を促してきた。

「おい、双汰。帰ろうぜ？」

そんな空気を見事に破ったのは学生服をしっかりと着こなしている天そらだ。

紺色の髪色は相変わらずサラサラとした美髪。それを見て若干羨じゃっかんうらやましいと思う双汰。

高校3年生である天と高校1年生の双汰はもちろん学年も違ければクラスも違う。

だかこの2人は親戚。そしてその近い親戚の中でも一番年上で社

会人である水祁^{みなぎ}に世話になっているのだ。だから帰る家は一緒ということで登下校は共に行動する。

「ほーい」

「・・・あれ？あの嬢ちゃん^{じょうちゃん}は・・・？」

いつもは側にいる人物を脳裏に浮かべ、あたりをきよろきよろと見渡す。

「休みー」

「へえ、珍しい。てつきり俺が来たから逃げたのかと思った」

他人が聞いたらただの皮肉にしか聞こえないような一言呟き、1年のクラスへとずかずかと入る。まあ双汰以外に生徒などいないのだから問題は全然ない。

「天兄^{てんけい}があんなことしたからだろ？おれもどっちゃかつーと蟹に同情する」

「・・・あの時の俺はただ純粹にお前等ガキ共を喜ばせようとだな・」

あれは暑い夏の日。

小学6年生の天は小学4年生の双汰をカブトムシ獲^とりに行こうぜと誘った。

無論男の子であり好奇心旺盛の双汰は快くその誘いを受け、2人だけでは寂しいからとその時から友人であつた蟹^{カイ}を誘ったのである。そして保護者として当時17歳だった水祁も引率していた。

しょっぱなっから蟹は男子と間違えられたり色々とハプニングはあつたが子供3人のテンションはぐいぐいと上がっていた。

『ほら、カブトムシ!』

年長でもある天は得意げに年下の子供に誇らしげに見せる。そして湧き上がる歓声（2人分）。

『すっごあい!』

『はは。じゃあもつとおもしろいもの見せてやるからな』

もつとおもしろいこと。そう聞いて子供達は目を輝かせ、おもむろに糸をとり、カブトムシの雄雄しい角に巻きつけ始めた動作を見つめていた。

白い糸はきつくまかれ、よほど強い力をいれなければ切れない状態にあった。

『よく見てろよ? 嬢ちゃん』

その白い糸をぐつと天は握り締め、渾身の力を持って力強く引く張った。

ぶちやつ。

なんともグロテスクな音が森の中に響く、というより蟹の鼓膜こまくに響いた。

蟹は目の前で行われた事にただ呆然とし、双汰も青褪めていた。

糸を引つ張った直後、綺麗にカブトムシは頭だけがとれた。もはや神業の粋だ（よい子も悪い子も真似しないよーに）。

黄色っぽい・緑色っぽい血液ともいえる液体がどろり、と姿を現した途端、蟹はそのまま気絶。

その後家に運ばれたのだが、目を覚ますと同時に天を見て『頭とられる
！！！！』と叫んだときすでに彼女の心の

中にはトラウマという癒えない傷が残されたのである。

そして今現在も進行中。

それが暑い夏の日の出来事。

「にしてもおかしいなあ・・・頭じゃなくて足一本一本とるほうがよかったか？」

「いや、どっちにしろただ引かれるから！ていうかカブトムシ好きな人にとつての冒険なんだけど！全国のちびっ子に謝れ！ムシキングに謝れ！」

「お、懐かしいな。俺もつてんの全部レアカードだぜ？」

「マジで??！じゃあ「スーパームシ ング」とか持ってた?！」

「持ってた。多分もう埋まってると思うけどな」

もはや話が逸れてきてる。

「おーい、お前等帰宅部生徒だろー。いつまで校内にいる気だ、さつさと帰りなさい」

『ういーっす』

少年2人は教師によって熱気だったテンションも下がり、それぞれ教室から出て行く。

「双汰、今日の夕飯なに？」

「トマトと生ハム、アスパラガスと天兄そらにいの嫌いなセロリを入れた冷製パスタ」

「！……おい、セロリはやめろ。せめてブロッコリーにしろ」

夕食のメニューの具材を聞いてそう言ったセロリ嫌いな天だったが、

「それ天兄の好物じゃん。好き嫌いはいけませんよ、もおっ」

まるで母親のごとく台詞を吐いて双汰は笑顔を浮かべた。それに、天はただ引きつった笑みを返す。

「まあセロリ調達しに行くから天は先に帰ってて？」

「おう……って待て！！調達しに行く？それってイコール俺への嫌がらせのためにわざわざあんな野菜買いに行くのか？！」
「はっ、しまった！　　違う違う違う。麺買いに行くんだよ！」

口を塞ぎ、手を振って弁解しようとしたが、すでに「しまった」と日常会話のときの声より大きな声音だったのでばれている。

「お前帰ったら……！」天はすでに腕をクロスさせて防御体勢にはいつている双汰を睨み、掴みつかかかろうとしたが「あ、生徒会長！さようなら」という学校の後輩数名に呼びかけられたので上げた拳をおろし、ころりと表情を一変させた。

「はい、さようなら。気をつけて帰ってくださいね？」

聖母の微笑と賛否を送っても足りない笑顔で天は挨拶を返し、生徒を見送った後双汰に視線を戻す。

「家に帰ったら覚えてろよ？」

「いやいやいやいや！！それよりさっきの猫つかぶりはどこに？！！」

「あれは社交辞令！一応俺生徒会長だし！」

「どっから湧き出たんだよその設定！」

飛び交う言葉言葉に最終的に天が面倒くさくなって「先に帰る！」という発言で終止符がついた。双汰も叫び疲れでさえ、はあと肩で息をし、スタスタと家へ帰っていく天を見送った後、「セロリ買わなきゃ」と八百屋へと向かった。

結局買っんですか。

IN 八百屋。そこで、双汰は運命的(?)な出会いを果たす。

「蟹^{カイ}！」

「ああ、双汰じゃないか。その格好を見ると学校終わってから直で来たんだね」

夕暮れにも映える銀色の髪色をした少女は、片手に赤く熟したトマトを持って笑った。

「そうだけど・・・んなことよりさ、なんでここに？」

「夕飯の食材を買いにだけど？」

少々抜けた答えを返してきた蟹に、双汰は「ちがうちがう」と首を振る。

「今日ガッコー休んだじゃん。腹痛だって聞いたけど・・・大丈夫なんか？」

「うん、大丈夫。腹痛っていうより・・・」「ストレス」だっただけだから

「・・・そ、そう、か・・・」

16歳にしてストレスを抱えているという発言に、これ以上深入りしてはいけない気がした。

まあ蠍王^{かつみ}さんと氷魚^{ひお}の相手してりゃあ誰だって疲れるわ・・・

少し失礼なことを思いつつ双汰も蟹の隣へ立った。

「蟹^ちん家は何つくんの？」

「冷やし中華。双汰は？」

「冷製パスタ。やっぱこの時期は冷たいもんがいいよな。今度一緒に飯食おうぜ」

「そうだね」

日が落ちていく中で、2人はそう約束を交わした。

他星座の1コマ

IN 魚座 水瓶座（喫茶店にて）

『あれ、何してるんですかこんなところで1人で（最後強調）』

「仕事の打ち合わせだ。予定時間より早く来てしまっただけだ」

『大変ですね。・息抜きに占いでもしましょうか？』

「まだ暇だし、かまわない」

『では・・・これ、引いてください』

「・・・おみくじ？占い師なのにか・・・？」

『細かいことは気にせんで、さっ！』

「わかった・・・（引いた）」

『えーと・・・吉ですね。物事は上手くいくでしょう。しかし待ち人はぼうつとしてたら通り過ぎていきますので注意。』

それとこれから自分の身に災厄が降りかかるでしょう。その時自身の天敵に注意です・・・気をつけてくださいね』

「ああ。・・・天敵、か』

2話 双子座 天秤座 + 蟹座の巻き（後書き）

他星座の1コマは次回予告っぽいです

お気に召していただけたでしょうか？
次回は明日更新したいと思います。

3話 蠍座と水瓶座の巻

「・・・ごほっ・・・っ・・・」

「水祁兄？風邪？^{みなぎにい}」

台所で食器を洗っている途中、奇妙な咳を漏らした水祁が気にな
って双汰^{そつた}は顔色を窺う。

「大丈夫だ・・・少しむせっ・・・ごほっ・・・だいじょうぶふうっ！！」
「ぎゃああああああああああ！！吐血ううううううっ！！」

3話 風邪と天敵

食器が血だらけになり、そしてぐらりとスローモーションのよ
うに水祁は倒れていった。

「がたーん！と大きな物音に、自室にいた天^{そら}でさえも駆けつけ
てくる。」

「なんか今すげー音がっ・・・って水祁兄じゃん！どーしたんだよ」
「血い吐いて・・・倒れて！！」

青褪める双汰の顔色と口の端から血を流して倒れている水祁を交
互に見やり、天は額にじわりと汗を浮かべた。

そして呼吸を整え、細かく息を吐いている水祁の額に触れた。

「!!・・・これは・・・」

「え？なに・・・？ミナ兄にいどうしちゃったの？」

すでももう涙腺るいせんが歪ゆがみ、泣きそうな双汰に天は息を吐いた。

「風邪」

しばしの沈黙。

双汰は眼鏡の奥の瞳を丸くさせ、きよんとしている。

「・・・風邪？・・・でも吐血してんじゃん!!」

「・・・いや、これは吐血じゃない・・・」

むくりと水祁は頬を蒸気させながらも言う。

「ただ「大丈夫だ」って言おうとしたとき舌を噛んでついでに唇も切れて・・・」

「ついでで唇が切れるかああああああ!!!!」

「まったく・・・ミナ兄はお転婆さんだな」

つん、と。唇から流れる血を拭う水祁の額をつつく天。

「どこのバカカップルのやり取りだあああああああ！！！！ と、とにかく病院行こうよ。おれも一緒にいくから！」

「大丈夫だ、双汰。お前はお前で用事があるだろ？俺1人で行ってくるから」

「ほんとに大丈夫？ミナ兄」

熱のせいでふらついている水祁の安否を気にして中々引かない家族に、水祁はただ苦笑する。

「心配するな。病院なんてすぐ側だし・・・」

「で・・・でも・・・」

「じゃあ行ってくる」

最後まで話を聞かずに、水祁はこれ以上心配かけまいとラフな格好のまま台所を出て、靴もかかとを踏んだような状態で家を出た。

一方、残された双汰はぽつりと呟く。

「・・・病院には・・・あの人」がいるのに・・・」

【1】

相変わらず薬の臭いと老人の香りが満ちている静かな病院内。

この88星座町の病院は正式名称「総合病院カンストレイション」
。通称「星座病院」と安直な呼び方で親しまれている1つしかない病院。

1つしかないだけあって設備は快適であり、診療科は内科・外

科・小児科・産婦人科・皮膚科・眼科・耳鼻咽喉科・リハビリテーション科・精神科・麻酔科の10科。充実しており、もっと細かくすればもうちょっとある。

そして廊下を歩く途中、ふと水祁は思い出した。

『災厄が降りかかるでしょう。その時自身の天敵に注意です』
(・・・「天敵」・・・いや、まさか、な)

「・・・ここか」

水祁は現在38.7分。高熱状態であり、行き先は内科。
「内科」と書かれたプレートを目指し、受付の看護婦に診察願いをした。

「珍しいですねー、水瓶座さんが風邪なんて」

「たしかにそうかもな・・・」

「ええ。あ、じゃあ診察室にどうぞ」

看護婦の女性に促され、水祁はドアノブをひねり、病室の扉を開けた。

そして待っていたのは

「ああ、いらつしゃい」

だあん！！！！

医者顔を見た瞬間扉を閉めようとした水祁だが、それは素早く
医者の手によって阻まれる。

「つく　　！！」

「病人が逃げようとしてんじゃねえよ」

そう冷たく言い放ったのは、水祁の「天敵」といえる人物、蠍王^{かつみ}
であつた。

今の蠍王にとっては熱でふらふらしている水祁など敵ではなく、
すぐに腕を掴んで室内に無理やり引き込み、近くにあったパイプ椅子に座らせ、落ち着いたところで自分も腰をかける。

「（うわ・・・あの占い当たってやがった）・・・何故貴様がここに？」

「俺お医者様だよ？病院にいないわけないじゃん」

それぐらいは水祁にも理解できる。馬鹿にされたのかと眉根を寄せながらも、平静を取り戻して尋ねた。

「お前は内科医師ではないだろ・・・？」

「ああ　・・・そゆことね」

にこ、と。最初に見せた口調も表情もすでない状態で笑顔を灯す蠍王に、ある意味水祁はぞっとした。

「内科の先生が「オレもう嫌だ！！」とかいって逃亡してさあ。至急すんげー暇だった俺に先生見つけるまで時間稼げってさ。いやあ、よかったよ君で」

「俺はよくないがな。聞くが、その「先生」とやらはまさか・

」
「驚座の驚君。志牛さんの双子の弟のうちの1人だよ」

その返答に、やっぱりと水祁は頷く。

「あいつ女嫌いだからな・」

「・ま、その話はいいとして・じゃあ診察始めよっか」
「待て」

嬉々とした表情で聴診器を向けてくる男に、水祁はのけぞった。

「何故だ？今お前状況説明終わったばかりだろ？」

「君、いますつごく顔赤いよ？ぶつちゃけ話すのもつらいでしょ」

図星であった水祁は沈黙の回答をする。

蠍王が言うように現在も視界が歪み、頭は痛く喉も痛い。さきほどの扉を即座に閉めるという蠍王に対しての拒絶行為もいつもより反応が遅かったのがその証拠である。

「だからこうして俺が直々に診察してあげるって言ってるの」

「結構だ。逆に悪化する・・聞いたぞ？お前幼女の血を見て興奮する性癖が・」

「ないから。てかその元情報最初より捏造部分が多いし」

「獅貴から聞いたんだが・」

「アハハ、あの野郎」

額に青筋を浮き立たせ、蠍王は頬を引きつらせる。

それを見て息を吐きながら、水祁は背もたれに体重をかけた。

「とにかく俺は待つことにする」
「いいの？」

蠍王は面白いものでも見るかのようにじつと水祁を見つめる。

「鷺君^{じゆ}、女の子は嫌いだけど好みの男ならOKな子だよ？　そう
いえばこの前水祁のこと「モロタイプ」って言ってた記憶が
」
「薬をくれ。すぐ帰るから」

色々寒気がした水祁は冷たい汗をながしながら手を出す。

蠍王は「最初っからそう言えいいんだよ」といいながら引き出しをさぐる。

そして妙に慣れた手つきでパソコンの操作をし、てきばきと薬を選出して最終的に小さな袋に纏め上げた。

「診察したらただの夏風邪だったみたい。だからそこまで強くない薬だしといたから。一応全部で2種類。朝昼晩で計6錠飲んでね？
2日分いれといたから」
「・・・ああ」

水祁は意外と真面目に診察をしてくれた蠍王に啞然としながらも
気力で頷く。

「なに？その目・・・毒でも仕込んでいた方が良かった？」
「いや、やめろ・・・まあ助かった」
「ん。じゃあ受付にいつてお金払って帰って永久に眠ってて」

爽やかな笑みを浮かべた医者に水祁は中指を突き立てる。
そしてばたん、と。音を残して去っていった。

人一人いなくなり、静けさが戻った室内に、また静寂を破る声が
発せられた。

「……………意外だなあ」

蠍王は、ふいに白いカーテンの向こうから聞こえた声に目を向ける。

「仲悪いとかって言うてるけど、なんだかんだいって仲良いじゃん」

そういつてひょっこりと頭を出したのは弓き。

彼はただ居眠りしにきたただけだ。

「弓クン、気味の悪いこといわないでよ」

「んじゃあなんで？」

「病人相手に嫌がらせするほど馬鹿じゃないよ」

パソコンのディスプレイに表示されている薬一覧の表を閉じ、
蠍王は笑った。

「借りとかもつくつとかなきゃ」

「……………悪役だ……………」

苦笑混じりの呟きは白亜色の室内に溶け込んでいった。

IN 乙女座 牡牛座 山羊座

「志牛、私いっつも不思議に思うことが・・」

「なんですか？乙妻さん」

「キッドって・・名前誰が付けたんです？ね、キッド」
「ミートウー」

「たしかに謎ですね。まあ謎がなかったらこの子はなんですかって感じしませんか？」

「・・そうですね」

「リッストウーミー。マイネームイズタゴサク」

「・・え？今なんていったこの子。田吾作っていったんですけど！」

「・・違いますよ。団子作って言ったんですよ。きっと」

3話 蠍座と水瓶座の巻き（後書き）

男ばっかで華がなかったです

「明日」といいつつも「明後日」になってしまった罨……
次回は少し長くなりますw

ちなみに鷺座が名前だけ出てきましたが、今後出てくると思います。

牡牛座（志牛）には弟が2人います。それが鷺座と白鳥座。
なぜこの2人なのかというと、この3つの星座はゼウスが意中の
相手を拉致るために変化した動物として有名な星座だからです。

ちなみに何故鷺座が女嫌いなのか。それは鷺座がさらったのが美
少年として有名な男の子だから。そっからきてます。ちなみにそう
いう要素はないです。香りはすると思いますが え

4話 ドラマ出演?の巻き(1)(前書き)

何話かはこれがメインで続きます。

4話 ドラマ出演？の巻き（1）

「ていうかさ、あんた今売れてんの？」

ある一言から、なんか色々が始まった。

第4話 映画に出てみない？

獅貴は、近所の子供その一である天そらにかなりショッキングなことを言われてしばし硬直した。その隣で、弓壺が苦笑する。

「天くん、獅貴は88星座町せいざちょうでは活動してないんだよ」

「ああ、都会でやってるってことか。どうりで・・・っていつでもこんなところにいるってことは結構な暇人なんじゃねえの？」

「暇人」。そこでまたも矢が心臓に突き刺さった獅貴。「ぐふおっ！」と血糊ちのりで吐血演出をしたが誰にも突っ込まれず話しは進められていく。

「あ、じゃあ獅貴の仕事場行ってみよっか！」

「お、さーんせーい！」

「ちよつと待て！！オレの心をズタズタに引き裂いた後になにいてんだよー！！」

復活した金髪男に少年と青年はにやりと笑う。

「いいのかよ。お前を仕事無しのダメダメ俳優と格付けするが」
「わかったよ！いいよ！くればいいじゃん！！」

大の男が泣いて蹲る姿は滑稽といえるが、天と弓壺「よし、じゃあ人集めてこよう！！」と小学生男子のノリでわ　　っと散っていった。

「・・・え？！まだ増えるのか？！！」

【1】

「天あ、お前本当に友達いねえんだな」

ライバル　好敵手Ⅱ羊一をつれてきた天。

「うるせー」

否定はしない青少年。

「何故俺だ・・・？3話に出たばかりで疲れているんだが」
「同業者（作家）ってことで協力してよ」

水祁みなぎを連れてきた弓壺。同業者というだけあって特に関係性はない。

「・・・なんですかこの団体は」

その状況を見て獅貴を見据えるのはマネージャーである乙妻だ。

「まあなつちまったもんはしょーがねー。乙妻、ドラマの収録があるだろ？仕事場見たいって言うから関係者カード渡してやつてくれ」
「はいはい。・・・じゃあ皆さん、これをどうぞ」

「関係者」と表記されているカードを手渡され、4人は首にかけ
る。

「んじゃあ車で出発するから。星座町を抜けて至高天まで行く」

至高天とは「都会」のことであり、その周りには「都市」、そして「町」、「村」と存在する。88星座町は10こはある平凡な町のひとつにしか過ぎない。

町の中でも田舎ともいえる星座町はあまりメディアが発達して
なく、興味のある者しかバラエティーや歌番組などを見ない。ほ
ぼ3分の2がニューズばかり見るのが星座町の住民。

だから、今の流行などには鈍感であるが故、売れっ子俳優の獅貴
の存在ですら疑うのである。

「つーかテレビくらい見てくれよ・・・お前等本当に俺が出てる番組
見たことねーの？」

助手席で項垂れる男に、4人のうち3人頷く。ちなみに見たこと
あるのは弓耒だけだ。

「っていつか俳優っていうこともこの前の会議（0話）で初めてし
ったし」

「うちテレビないし」

「・・・デビューしたのがいつだ？」

思い思いに吐き出す3人に、獅貴は息をつく。

「デビューは10歳！子役からだよ」

「売れてきたのは12さいころからでしたよね。ある映画の主役の弟役で」

車を運転している乙妻が当時を懐かしむように語った

「・・・乙妻はいつからマネージャーに？」

「私は18歳からですよ。だからまだ2年しかたってません。でも有能なマネージャーとしてお褒めの言葉を頂いています」

水祁の問いに答え、乙妻は小さく笑った。

その横顔を、獅貴はどこか悩ましげに見つめる。

「・・・乙妻、お前・・・老けてんな」

「マンホールの中にぶち込みますよ？」

笑顔のまま言われ、獅貴は背筋を震わせた。

そしてやってきた大都会至高天。
エンピレオ

まず車から降りた天は頬を紅潮させ、目を輝かせた。

「うつわあ・・・やっぱ都会はすげえな、たくさん「人^{ヒューマン}間」がいる
！」

至高天にいるのは獅貴たちのように「星座」などの特有の血筋や能力を持っていないただの人間達だ。役目も無いため、つく商業も限られずどこに行ってもいい。

至高天に住んでいるのが人間達で、都市・町に住むのが「星座」や「神々」、そして「悪魔」や「幻獣・聖獣・動物」。村に住むのは上記の人物達が集まっておこした村などだ。

そしてそういった「人間」とは少し違う種族は、「人間」のことをビーインを呼ぶのだ。

「ぶらぶらしてんな。こつちだぞ」

獅貴がひらひらと手を振っている。有名人だからやはりお決まりのメガネと帽子を被っていた。

「ほいほい」

「あ、待ってよ羊」

「はあ・・・暑い・・・」

都会には何度も来たことがある3人人はすすいと人ごみを抜けていくが、はじめてきた天は流されるばかりで、思うように進めない。

それに水裃が気付き、手を差し伸べる。

「・・・手」

「・・・繋いでくの？」

頷く水裃。だが、天がそれを拒否した。

「やだよ、こんな年にもなって手え繋ぐのなんか!」

「・・・そうだったな、悪い。俺はお前の母親ではないからな・・・」
「いや、母親でも繋がらないから！まあ人ごみ抜けるまでならいいけどよ・・・」

そんなやり取りが繰り返れながら、テレビ局までついた6人。こっちですと乙斐に促され、ともかく見学者である4人はマネージャー専用の部屋へと通された。

「まあとりあえず収録が始まるまでここで待っていてください」
「何時からなんすか？」

「12時からです。あと30分つてとこですかね」

頷いた天は「思ってたよりも早いな」と呟いてから後ろの3人を見る。

「弓壱は獅貴の演技みたことあんだっけ？どんなカンジ？」

「どんなカンジ？素人から見た俺から言わせれば「すごい」の一言しか浮かばないなあ」

弓壱自体もよくわからないらしい。こういうのは乙斐にきいたほうが賢いのだが、頼れる彼女は仕事のためもはやいない。

「・・・どうでもいいが俺は今書いてる小説の原稿の締め切りが明後日なんだ。早くしなければ・・・」

こんなときまで仕事専用のノートパソコンを開く水祁。それを見て、弓壱は笑った。

「真面目だなあ。俺なんか締め切り今日だって言うのに」
「じゃあ仕事にもどれ」

誰もが頷く正論を、弓壺は軽くスルーし、「そろそろ時間だね」と言って立ち上がった。

呆れながらもうなずいた3人も立ち上がり、ドアを開いた弓壺に続こうとしたが、ここで、ある人物と遭遇する。

「・・・あれ？弓クン・・・？」

「蠍王^{かつみ}くん・・・?!」

タートルネックの上に白衣を着た、暗赤色の髪色をした端麗な容姿の男が、驚きに目を見開いている。その後ろには、いつもは伸びきっている銀髪を櫛で綺麗に梳かし終え、どこかの高校の学生服を着用している蟹^{カイ}がいた。

「・・・弓壺さんに、羊一に水祁さん・・・そ、天さ・・・！」

天の姿を確認した後、条件反射で頭をおさえる蟹^{カイ}。その顔は真っ青で、今にも気絶しそうだ。

「んな怯えんなよ嬢ちゃん・・・」

その反応に苦笑いしつつ、天も蠍王を見た。

「どうして2人がここに？」

「んー・・・なんか知らないけどさぁ・・・久々に蟹と出かけたら変な人に「協力してください!!」ってなきつかれちゃって・・・」

「よくわからないが、1話目に登場する医者役と主役に依頼をする女子生徒役がインフルエンザにかかってしまったらしくて・・・」

「うっわぁ、不幸の連続だな」

羊一がヘッドホンを取り外してケラケラと笑う。

「別に俺が出るのはいいよ？でも蟹が全国ネットで流れるってのが許せないんだよねえ……。ただでさえこんな可愛い子、テレビの映ったらどうなると思う？」

「どうもならないよ。あとすっごく恥ずかしいからやめてくれないか」

本人からの否定。

というか本人以外は何も言わなかった。同意はしがたいが否定はもつとしたくなかった。

「でもさ、この1話だけなの？出演するのは」

弓壺が尋ねると、蟹が苦笑する。

「それが全20話のところ、3話まで出るらしい。元々この役にはマイナーな俳優を頼んでいたらしいからこれでも少ないそうだ……。・といったかったが、状況が変わった」

蟹の言葉に、蠍王を除いた全員は首を傾げる。

「このドラマの監督が蠍王とわたしの「コンビ」が気に入ったらしくてな、このドラマでわたし達の評価が高かったら最終話まで採用するとうんだ……。・」

「すげーじゃん。頑張れよ」

応援する羊一だが、蠍王は不機嫌だった。

「違うね。あの女好き監督^{ヤロー}ただ蟹に目えつけたただけだ！でも俺を降ろすと蟹が拒否するからそんな条件をいったまで！きつといつか手籠めにす「お前の妄想はどこまで続くんだ！！だいたいわたしは可愛くないし男から好意など受けたことも無いぞ？！（悲しい事実だが）」

最後まで言わせず遮ったその叫びに、「ああ・・・」と残りの男達は思った。

【そりゃそーだ。片っ端から蠍^{さん}王が潰してるし】

だが、そのもう1つの事実が彼女の耳に伝わることは無いだろう。

続く

4話 ドラマ出演?の巻き(1)(後書き)

2 '3人くらいしかキャラをつかめてない事実

続
(2) (前書き)

続きです。

続 (2)

ざわざわ。ざわ。

ついに収録。まずは台詞合わせからのリハーサルが始まるうとしていた。

第4・2話 役者になりますか？

「あー・・・だるっ」

そう呟くのはこのドラマの監督。まだ24という若さで何本もの映画などを成功させている期待の星である。

上記の発言もそのせいで天狗になっているからとかそんなのではなく、元々そういう奴なのである。普通なら怒りを買うような態度も、顔が良かったためうまくカバーされている。

「あ、あの人は・・・」

その様子を遠くから見つめていた弓壺・水祁・羊一・天は目を瞬かせた。

「志牛さんの弟の、白鳥座の鶴さん」

志牛の2人の弟のうちの1人、鶴は映画監督。そして双子の弟である鷺座の鷺が男好きときたら兄貴は女好きである。志牛にはない汚れた部分をもつ双子。

「あ、ほんとだ。なつつかし。双子でも二卵性だから相変わらず似てないなあ」

そうやってじつと見ていたせいか、鶯はこちらに気付いたようです。イスから立ち上がって近づいてくる。

そしてにかりと笑顔を向けてきてくれた。

「弓壺くんじゃないか。久しぶり」

「はい、お元気そうで。鶯さん」

友好的に握手をしあう男2人に、なぜか感動すらも感じられる残りの3人。

「と、水祁。相変わらずでけえな、お前」

「お久しぶりです、先輩」

鶯はにかりと笑い、10センチは差がある水祁の頭に手を伸ばしてくしゃくしゃと撫でた。

2人は同じ高校の出身であり、先輩と後輩という立場だった。

「あとは・・・牡羊座と天秤座の子供か。5年はあっちに帰ってなかったから懐かしいもんだ。羊一なんかあのとき中坊だったろ？天は小学生だったな」

「俺今19歳だから子供じゃないっすよ、おっさん」

「オレだってもう高校せいだ、おっさん」

生意気なガキ共は直後おっさん・・・ではなくお兄さんから頭にチョップを食らう。素早く一瞬なのに、何故かじんじんと痛むらしい。

「ま、立ち話してる間に仕事始まるから手短にいうけどよ、ちょう

どよかった。左から職業いつてきな」

「美容師兼学生」

「取材記者」

「小説家」

「作家」

どんどん字が減っていつてる。と、そんなことはどうでもいい。
鵜は満足そうに頷き、びしりと4人を指差した。

「お前等エキストラやってくれよ」

『却下』

「いいですよ」

同意したのは弓壱だけであつたが、鵜はその返事を全員同意と受け取る。

「あと少し台詞あるんだ。まず「クラスメイト役」に天。お前すげえ美人じゃん？ま、頼む」

「ええ……つか美人っていうなよ、きもい」

素直じゃない子供に頭突きをかましたあと、頭を押さえて蹲る天から視線を外し振り返る。

「んで、羊一。取材記者ならちょうどいい。新聞会社の社員役な」
「まじっすか」

「水祁と弓壱は普通に喫茶店の客役やってくれない？」
「いやで「わかりました」」

返事をきいて満足げに頷いた鵜は、「んじゃ頼むな」といってリハーサルを見に行った。

【1】

「まさか蠍トコジと共演することになるとは・・・しかも医者役ってモロハマリ役」

台本をもって頭を抱える獅貴き。プロでも相手が相手だとやはりちよつといやだそうだ。

「俺だつてまさかドラマに出るなんて思ってもみなかったよ？あと君って主役なんだね」

台本から目を離さず蠍王は言う。

「・・・蠍・・・たしか素人だよな？」

「そうだけど？」

「じゃあなんでそんなに偉そうなんだよ!!」

普通は獅貴や大物の出演者にしか配られないような弁当をほおばり、獅貴に用意されたイスを陣取っている蠍王。

「いいじゃん。君のなんでしょ？さつきから誰も文句いってこないしさあ」

たしかに、誰も文句など言っていない。

それは獅貴と顔なじみらしいという理由もあるが、それより「蠍

座」の持つ能力であるミスティアスな雰囲気^{スキル}が妙に近寄りがたく邪険しずらいからである。

「・・・はあ。リハーサル始まるからそろそろ位置につこうぜ。台詞は覚えたか？」

「一応」

「蟹^{カイ}は？」

「エキストラの女の子たちに囲まれてた」

その言葉に、獅貴はぎょっとした。

自惚れてはいないが自分にファンが多いのは自覚している。一般募集だったエキストラ組の女子はほぼ大半がそうだ。しかも蠍王は容姿とオーラもあり人を男女問わず惹きつける男だ。そんな2人と関係性があるとならば、不愉快に思う女性が多い。

「大丈夫なのかよ、ソレ！」

「大丈夫も何も俺今凄くむかついてるんだよ、何アレ」

じろりと蠍王は暗がりで見群がる少女たちの集団をにらみつけた。まさかと思い獅貴もそれに倣って少女たちを見て、

「は？」

間拔けな声を上げた。

たしかに獅貴の予感どおり蟹は少女たちに囲まれている。だが文句をいわれたり、何かされているわけではなかった。

「あの、蟹さんってこの収録終わったあと暇ですか?!」

「この後？暇ではないですが用事があるというわけでは・・・」
「その銀髪って地ですよ？」「12星座」のお役目も持っていて
して素敵です！！」

「そ、そうですか？あ、ありがとうございます」

「このドラマをきっかけに役者デビューとかするんですか？」

「いやいや、そんなことは・・・」

「よろしければスリーサイズを！！」

「そ・・・そういわれても私自身もよく知らなくて・・・」

「じゃあ計らせてください！！」

「あ、ずるーい！！いいなあ、あたしもあたしも！！」

「ちよつと皆さん、蟹さんはわたしと話をっ！！」

質問攻めの荒らしの末結果色々いじられている蟹。
それを見つめて、獅貴はただ呆然としていた。

「女の子って怖い・・・」

「どうせならいちゃもんつけられてればよかったのにつ・・・そうすれば俺がいいとこ独り占めなのに！」

「おい、素直なのはいいが下心がある本音は隠せ」

いやな奴だとは思うが仲の悪い「幼馴染で」あるがためにどうしても心配してしまう。

相性が悪い3星座として有名な蠍座・獅子座・水瓶座だが、もはやその気持ちは真の親友のようだった。

【2】

「はーい、じゃあ学校での1シーンから！」

若い男の声により、出演者からエキストラまではとし、自分の役をたしかめ配置につく。

「『愛^{まな}』が主人公の『武内^{たけうち}』に悩み相談をするシーンから！」

ちなみに話しのストーリーはこうだ。

主人公は武内主澄^{たけうち すすむ}。教師兼「悩事受付屋^{ノウゴトうけつけや}」という個人的事務所を開いている。「仕事しろよ」と言われるのが日常茶飯事。

強い霊力を持っており、そのためか悩みを解決してくれと頼まれる仕事は幽霊のことばかり。獅貴が主演ということもあり、期待が高い作品だ。

そして蟹がやる「愛」は本当はこの回と次の回らへんで終わる使い捨てキャラだが、監督の言葉により今後も続行になるかならないかが決まる。

「んじゃリハからよーい、スタート！」

緊張感が高まり、さわがしいクラス模様が演出させられる。

「ねえ、愛あ。顔色悪いよ？」

「そ、そうかな？大丈夫だよっ」

リハーサルとはいえ、皆至極真面目に演技している。

さきほどまで子供のような笑顔をを浮かべていた監督である鷗^{うみ}も、じつと演技を見つめていた。

「ちょっとあたしトイレ行ってくるね？」

「うん、行ってらっしゃい」

愛は立ち上がり、飛び出すように廊下をでた。

「はいオッケー！本番もそんな感じで頼むよー。じゃあり八は十分行ったので本番いきまーす！」

「え、もう？！」という雰囲気の一部で流れたが、一応り八は1時間やったわけだ。そろそろいいころあいだろうと思うもののほうが多い。

「んじゃ本番！「愛」が暗闇の中、3学年の「祥一」^{しやういち}を自分に憑いてしまった悪霊と勘違いするシーンから！っスタート！」

ここで、エキストラ役として演出を見ていた羊一が、はっとした。

「・・・おい、弓壺！！」

小声だが、力強く隣の弓壺を揺さぶる。

「天は？！」^{てん}

「・・・出番・・・あ！！」

弓壺も気付いたらしく、水祁のほうへ振り返って額に汗を浮かべた。

「まさか、天が・・・出番、なのか？」

「愛」と対峙する上級学生役・・・。

イコール

蟹と天が、お互いの役をしらぬまま対峙してしまう。ということだ。

続く

続 (2) (後書き)

白鳥座が監督として登場しました！。

多分この回が終わった後はあまり出てきません。

相変わらず文才がないですが；続編も宜しく願いますw

続 (3)

学校に荷物を忘れた。
しまったと思いつつ、少女は暗い学校の中に足を踏み入れた。

第4・4話 本番スタート

緊張感高まる場面は蟹^{カイ}が演じる「愛^{まな}」によって構成させられており、ある3人を除いては全員その役に魅入っていた。
そしてある3人、羊一^{よついち}・弓壺^{ゆみひと}・水祁^{みなぎ}は青褪めながらその続きを脳裏に浮かべる。

「きつと「天さん?!」とか叫んで失神じゃね?」

「だろっね」

「……………だとしたら追い出されるかもな」

そうどんどん先を考えていくと涙が出そうだった。

『……………不気味』

そうこうしているうちに、ついに対峙シーンへと入っていく。

ライトであたりを照らす「愛」。そして、暗闇の向こうに光を射

「おい・・・今はっ・・・！」

がっ！と落ち着かせようと肩を軽く掴んだつもりが、混乱に拍車をかけ、蟹は腕を振り払い、身をよじりながら壁に手をつく。

「も、もももしかして私の頭ももぎとるんですか？！あなたの手にかかって散っていった「彼等」だけでは飽き足らず！！」

ちなみに「彼等」とは天が頭を引きちぎったカブトムシ達のことである。

だが、もちろんそんなことを知らない者たちは「これは・・・一体どんな繋がりが・・・」とドキドキと胸を高鳴らせる。

「あれはただ、お前を喜ばそうと・・・」

「やめてください！！小さい頃、遊んでくれた記憶はあるけど、あれが・・・私にとってどれだけ怖かったか！！」

一見学生同士のいざこざに見える会話が、何故かダークな演出になっており、監督・鵜^{つぐみ}は頬を紅潮させ、「台詞が違うじゃないか」と止めに入ろうとした者を手で制す。

「やらせる。・・・おい、獅貴。アドリブでいいからいい感じに近づけてくれ」

「ういっす」

獅貴はにかりと笑い、「役」ではなく本人同士としてお互いの立場を忘れてトラウマトークに走っている子供2人を止めにはいった。

もちろん、本番のまま。

『離れる!!』

獅貴は蟹の肩を掴み、天を軽く突き飛ばす。

いきなり「離れる」といわれた上に突き飛ばされ、天は文句を言おうと獅貴を軽く睨んだが、今は「演技」の途中だということに気付き、立ち上がる。

『お前は悪霊だな?』

『・・・・・・・・つ』

何も言わずに立ち去る。これが今の状況にぴったりだと思った。そしてこちらにも正気に返った蟹ははっとし、獅貴を見上げる。

『あ・・ありがとうございます。先生』

『今のは一体?話を聞かせてはくれないか?』

「愛」は、少し考えた後、重く、ゆっくりと頷いた。

「はいカット」

満足げに言った監督に、全員が視線を向けた。

「か、監督!今のは隠してたんですか?!」

「ちよつと待ってくれ、台本どおりじゃないだろう、この話は」

「説明を!」

「まあまあ落ち着け」

騒ぐスタッフや出演者を静かにさせて、鵜^{つぐみ}は笑う。

「サプライズだろうとなんだらうと、この流れでいく。普通に主人公だけ目立たせるのはどうかと思ってたところなんだ。」

愛役の蟹^{カイ}さんと、上級生役の天^{そら}くんには今後話しにでてほしい。色々と気になる会話もあったところだしな」

うんうん、ナイスアイデアと1人頷いて、「いいだろ？」と周りのものにも訪ねる。一瞬返答に困ったが、1人が「いいと思う」と口に出すと、あつという間に賛成の声が上がり、広い室内を埋め尽くす。

「と、いうわけだ。こんなノリにしまった君にも責任があるから、拒否権はないよ」

蟹は「はあ」と頷いて、ちらり、と出番がまだなので居眠りしてた蠍^{かつみ}王に目を向けた。今起こすのは可哀想だから、あとにしようといとまず心を落ち着かせることにした。

【1】

休憩時間。

星座同士で集まり、はあ、と息をつく。

「まさかオレが「愛」と関係の深い妖怪役とはね。しかもその妖怪が「キツネ」かよ」

「キツツネ耳」。楽しみだねえ」

早くも「キツネ」姿にうきうきと心躍らす弓壱に、天はドロップキックをかます。見事に決まった。

「すみません・すみません天さん。平常心を保つてるときは2メートル離れていれば大丈夫なんですが・いきなりだったんで混乱しちゃって・」

「さりげなく傷つくこというよな・嬢ちゃんじやうちゃん」

すみませんすみませんと謝る蟹に、獅貴はぽんと手の平を頭へ乗つけた。

「まあいいじゃねーか。今対処するあの魔王だぜ？」

「あ」

すっかり忘れてたといわんばかりに蟹は足を組んで悠然と座っている青年へと目を向ける。これ以上ないくらい眩まはゆい笑顔が逆に不気味。

「まだふくれているのか、蠍王」

ふに、と頬を掴んできた水祁に大しては笑顔を向けて「顔が近い、離れる」といつもより数段低い声で対処する。

「蠍王、今回は私が悪い。すまない」

「俺がむかつくのは監督・まあ強気に出れない蟹も蟹だけど、過ぎたことは仕方ないさ」

蟹が酷く申し訳無さそうにいえば、だいぶ機嫌は直ってきたが、監督・鵜つぐみにはまだ怒りが抑え切れてないらしい。イライラしながら水祁の頭をいじっている。

「まあお前も評価が高かったら出演決定なんだからさ」

獅貴が慰めるように言ったが、それは何の慰めにもなりはしなかった。

「別に俺はドラマに出たいわけじゃないんだよ・・・でも蟹が強制的に出ることが決定したなら頑張らなきゃね・・・」

しかし気休め程度にはなったようだ。不機嫌さもとれてきて、まともな表情になってくる。

「俺たちはもう出番ないから、あとは獅貴と蠍王だけだな」

羊一・弓壺・水祁はエキストラ中のエキストラ。出番は本当に画面に数秒映るか程度。あまり乗り気ではなかったためこのくらいで十分だった。

ちなみに台詞はある。

羊一は新聞会社の社員役。オフィスに響くか響かないかの声で『コピー用紙足りませーん』というのがセリフ。

弓壺・水祁は喫茶店の客役。「愛」の悩みを「武内」が聞いているときの場面で、そのとなりの席にいる一般市民役だ。最初にセリフはあったのだが、あまりにも水祁の棒読み感が爆笑しか引き起こさないのかット。

そして、場面は「武内」が悪霊のせいで怪我を負った「愛」を知り合いの外科医に連れて治療してほしいと頼む場面だった。

医者の名前は「日馬由一^{くわま ゆいち}」。「武内」と同じく靈感が強く主人公の好敵手であり仲間であり理解者である男。というのが設定だ。

「わかったかー？さそり蠍。いつものお前のその毒気オーラは消せ」
「うっせえ命令すんじゃねえ」

獅子と蠍は笑顔をお互い浮かべたまま火花を散らした。この後どうなることやら。

続く

続 (3) (後書き)

長編は苦手なのでぐたぐたです；
でも好きなんです

まだまだ続きますw次回も宜しく願いします

続（4終）

台本を投げ捨てた蠍王に叱責をした獅貴は本番前10秒前に、背後から獅貴の腋下に頭を入れ、両腕で相手の胴に腕を回しクラッチして持ち上げ、自ら後方に反り返るように倒れ込み、獅貴の肩から後頭部にダメージを与えた。これを「バックドロップ」という。
さあ、みんなもレッツトライ！

第4・6話 毒蠍と獅子王

綺麗に技が決まったので死んだかと思われたが、役者魂の支えのお陰かはたまたただタフなだけか。5秒前くらいに立ち上がり、蠍王を睨みつける。

「痛えだろうが」

「悪い」

手が先に出るタチなんだ、と悪びれた様子もなく言うが、これでも謝っただけで十分に反省していることが読み取れる。

そして、喧嘩している暇もなく本番が始まった。

監督から威勢の良い合図が発せられる。

「日馬！怪我人だ、すぐに手当てをしてやってくれ！」

さすがはプロ。すぐに役の顔となる。

『怪我人？掠り傷程度で病院に駆け込むとはお前も心配性だな』

『日馬・・・こいつを見てわからねえのか。霊に障られたんだ、お前なら浄化してやることができるだろう』

日馬はうなずく。だが、了承はしなかった。

『何故見知らぬ他人に私が・・・』

続々と進んでいく場面に「どっちが主役だっけ？」とあつてはならない疑問符が浮くほど雰囲気は白熱している。

そして、カットの声はなしに場面は進んで行き、ついに一番の見所である日馬と武内たけうちのすれ違いによって行われる軽い喧嘩シーンに入った。

『お前はそうやっていつもいつも!!』

武内は日馬の胸倉を掴み、眉根を寄せる。

『我侬で、横暴で、自分主義の残酷な奴だ！霊や妖怪にも、人にも、なんで優しくできないんだ、お前は!!』

「・・・・・・・・」

ここで、はっと周りは我に返り、焦った。ここで日馬は「うるさい！お前に何がわかるっ」と一喝するセリフが出る。だが蠍王は無言で、獅貴をじっと見つめていた。

もしかやセリフを忘れたのか？！とハラハラしたが、何故か彼は綺麗な微笑を浮かべる。

そして、

「うるさい」

笑を浮かべ。

「貴様に何がわかるっ！」

「いだっ！！」

そうセリフを吐いた後、獅貴の首筋に手刀を叩きつける。獅貴は痛みに呻いてがくりと膝を落とし、屈んだ状態になった。

それを狙っていた蠍王は獅貴頭部を素早く両方の太ももではさみこみ、彼の胴を抱え込むようにクラッチして持ち上げ、そのまま脳天から垂直に床に叩き付けた。

がアアあああん！！！！

と頭蓋骨が落ちた音がして、うめき声さえも掠れてよく聞こえなかった。ちなみにこれを「ドリル・ア・ホール・パイルドライバー」という。プロレス技だ。

脳天からいったせいでびくびくと痙攣けいれんしている獅貴から離れ、蠍王、いや日馬として演技を続ける。

『君は甘すぎる。これは私からの餞別せんべつだ』

本来なら平手打ちだったはずだが・・・とスタッフ達は硬直しながらも青褪めた。

「はい、カーツト!」

監督からのカットの声。観ていた関係者全て「いいの?これでもいいの?」と監督を見るが無言の監督。むしろ笑ってすらいる。

「・・・とにかく・・・病院に連れてけば・・・?」

提案した水祁に。

「大丈夫、獅貴は丈夫だし」

「そうそう」

「死にたくても死ねない奴だ。きっと生き返るさ」

まともなことを返す奴はいない。

「私もそう思う」

常識人^{カイ}ですらそう言ってしまったら、水祁も何もいえなかった。

【1】

「で・・・打撲だけで生還するというオチか・・・」
「うっせえ」

唯一心配していた水祁の頭部に軽くチョップをかます。

「つーか蠍ヘビい！！てんめえよくもやってくれたな？！」
「悪役みたいなセリフだね。いや、演技ってわかっててもけっこうイライラするもんで」

ああ、一発殴りたい。獅貴は決意を固め、拳を握ったが、それは羊一に「どうどう」とたしなめるように声をかけられたのでひとま
ずおさめた。

「いやあ、よかったよ。すごかった、うん」

監督、鵜は絶賛しているが、こんなはちゃめちなドラマで視聴
率かせげるのかと不安に思う。

「人はスリルを求めているんだよ。しかもぽつとでのこのドラマ限りの「役者」さん達だ。ドがつく素人のな。メディアも注目するだろうよ」

なるほど、それを狙いなのか・・・とその場にいた12星座ならず
まわりのスタッフや係員も納得する。鵜はたしかに有名監督だが、
その有名は作品のよさのほかに本番中にストーリーの変更をしてしま
うという監督にはあってはならないことを多々行うとして有名で
もあった。

「とにかくお疲れ〜これで終わりだよ」

出演者をやってくれた獅貴以外の者達には手の中に飴玉を渡す。

「おいおい、報酬ほうしゅうは飴玉うめいっすか？鵜さん」

エキストラだったからまあいいけど、と笑う羊一に、「お前等に

はな」と鵜は笑った。

「エキストラには飴玉だ。でもそのお三方にはギャラもちやんと支払うさ」

そういつて笑みを残し。去っていく。
去っていった後で、弓壺は微笑んだ。

「これさあ、たしか一粒千円の飴玉だよ」

「マジ?!」

「・・・悪い、俺桃味食えないんだ」

「じゃあ俺と交換する? ミナ兄」

「一粒千円・・・それはどのくらいの価値だろうか?」

「ガチャガチャが10回できるねえ」

「・・・お前等、貧乏人だな」

ぼつりといった獅子座に

「そういうあなたは金銭感覚が少々狂ってるようですね」

ずっと放置プレイを受けていた乙女座が鬱憤を晴らすべく五寸釘
とかなづちを用意していた。

「呪うの?!俺を?!」

「いいオチじゃないですか、あなたが呪われて終了です」

「嫌だよ!だらだら長く書き渡って結局俺がやられ損?!!!」

「はは、まあいい声でせいぜい絶叫してくださいよ、百獣の王ですよ?」

獅子の咆哮という名の叫び声は高く、大きく、遠く、彼方に。

続（4終）（後書き）

ほんとぐたぐたですみません（土下座）

4話はコレで終わります。次回は5話にて！

5話 蟹座と双子座と「セン」の巻

転入生。

一見きいたらなんか嬉しい響き。

「うちのクラスに転入生？！女かな？男かな・・・？」

期待を孕ませ担任の合図によって入ってきた新しいクラスメイトを見て、大抵はすぐに熱気は冷める。なぜなら人は過剰な期待をしすぎるからである。それか、想像と異なってすぐに現実を見た、という場合かもしれない。

だが、双汰そつたは少し違う。

苛立ち。転入してきたクラスメイトに怒りを感じていた。

「・・・そのメガネ、伊達か？似合わねーぜ？」

「初対面の奴にそんなこと言われたくないんですけど」

長い黒髪に、黒い帽子を被った、男とも女とも分らない転入生が。

5話 黒くて喋らないキミ

どうやら性別は「女」らしい。

言葉遣いが少し男らしいのは、この国の言葉を覚えるとき、側にいた人が男であつたからだという。

「気が合いそうな人だ。私は好きだな」

「そうか？俺は苦手だ」

メガネのことを言われるのは昔っから嫌っていた双汰。それを初対面の、少女に、笑われたのだ。気分がいいはずがない。

「そうかつかするな、双汰・・・」

蟹^{カイ}が宥めれば、双汰も納得いかずとも怒りは冷めてくる。

「すごいな、幼馴染パワー」

「うおっ！て、ため、こっちくんじゃねえよ」

にゅつと顔を出してきた黒の少女に過剰反応する双汰。
名前は・・・なんといったか。

「小さい男だな。ボクの周りの男達とは全然違う」

どこか誇らしげに言う少女の笑顔は、双汰には嘲笑いに見え、蟹には嬉しそうに見えた。

「すまない、名前はなんだったかな」

「・・・センと呼んでくれ。ボクの「愛称」みたいなものだから」

にこ、と笑う少女、「セン」はやはり少女だ。口調のせいで中性的にも見えるがやはり仕草は全て女性らしい。もしかしたら蟹よりも女っぽいかもしれない。

・・・だが、どう見ても同い年には見えないほどその少女は幼く見えた。身長は蟹より少し低く、身体の線が細いため大人っぽく見えるのだが。

「ボクは、なんと呼べばいい？」

「蟹^{カイ}でいいよ」

珍しくフレンドリーな蟹の態度にも双汰はなんだかイライラしていた。長年愛用していた物を、他人に勝手に使われたような気分。恋慕はないが、（あつたとしても蠍^{かつみ}王にばれたときが怖い）親友以上恋人以下の関係だ。大切に、他人の中で一番信頼できる相手。

「なんだメガネ、嫉妬^{シエラシー}か？」

「そうだよ悪いかコラ」

「すまない。口は悪いけど双汰はいい奴だから」

蟹のフォローに、センは小さく笑う。

「I know」

ちらりとみえた白い八重歯。

笑う方は子供っぽくて、誰かを連想させた。

「お前、どつかで会ったことないか？」

「なんだメガネ。古いナンパの仕方の練習か」

真顔で尋ねてきた少女の頭に鉄拳を落とし、「違エよ」と冷たく言い放つ双汰。

「・・・It is a joke」

痛みに耐えながらセンはそう言う。

「・・・なるほど、やはり違うのか・・・」

そして、ぼそりと言った。

「ん？何か言ったか、お前」

「ああ、言った」

雰囲気的に隠せ。

だが隠さず頷いたセんに蟹が首を傾げる。

「なんて？」

「「違う」と。ボクはあんた達の間にある関係性を頼まれて調べきたんだ。まあ年齢を偽って転入してきたということだな」

よく喋るな。そう思ったが、同時に耳を疑うことも言っていたような気がする。

「今なんて・・・？」

「だから、ボクは蟹とメガネが本当に親友なのか調べにきたんだ。カマかけてみたりな。それで友ということは立証された。いや、こんな姿をさらしてしまったがまあいい」

何を言っているのかわからない。

「・・・どういうことだ？誰にそんなことを？」

「カツミとシグとミナギだな。ボクの元保護者と現保護者と契約者からだ。あんた達の保護者でもあるしな」

センの話によると、その男同士は偶然喫茶店で鉢合い、「あの2人は親友かな？」という議題にあがったというわけだ。

『まあ幼馴染で腐れ縁・・・ずっと一緒にいますね』

志牛がもつともなことを言うと、水祁もうなずく。

『では友だろう？』

その言葉に、蠍王があははと渴いた笑いを上げる。目は笑っていない。

『どうでもいいけどそろそろ俺、双汰が目障りになってきたんだよね』

本気だ。いくら子供であろうと容赦はしないらしい。
だが無論、保護者みつちが黙ってはいなかった。

水祁は立ち上がり、ぎろりといつもは無感情な目に殺気を灯す。

『家族そつたに手を出してみろ。俺が全力をもって潰す』
『上等じゃねエか。今やってもいいんだぜ？』

蠍王も禍々しく口角を歪め、立ち上がった。

『・・・受けてたつ』

売り言葉に買い言葉。

まさに昼間ののんびりとした喫茶店が地獄絵図としてかそつとそたとき。

『おやめなさい』

優しいのにどこか低い声と共に2人のこめかみに、フォークの持ち手の部分の先端でブツ指す。

ごっ。。。

と鈍い音と激痛。大の男2人はその場でこめかみをおさえてうずくまった。

『志牛・・・っ』

『落ち着きが足りませんよ。・・・黙んねーなら今度は尖ったほうでやるぞ?』

笑っていない目に「本気だ!!」と確信した2人は膨れながらも黙った。

『ふふ、では一件落着いたところで、「キッド」。調べてきてくれませんか?』

『あいしー』

・・・

・・・

・・・回想終了

「ってちよつと待てエエエエええええええええええええええええ!!」

双汰がまるでちやぶ台をひっくり返すが如く勢いよく机を飛ばす。見事だな、と蟹がぱちぱちと拍手を送った。

ちなみに飛んでった机は運悪くクラスの委員長にぶつかった。す

ぐに救急車で運ばれ、クラスメイト達はみんな「・・・風です」と目を逸らして証言するのはまたその後のこと。

ともかく双汰はセンの肩をを掴み、もっとも気になるところを尋ねた。

「お前、山羊座か?!?!」

「Yes」

「なんでフードとると英語が流暢になるんだよ!?!」つか女だったのか、お前!?!」

そうそうとセン・・・いやキッドは笑み、ネコミミ型の黒帽子を被る。そうすれば、少し面影が見えてきた。フードから流れそうな黒髪^{カミ}の絶妙さは、たしかにキッド。

「なんつーかよオ、シグはボクを学校にも入れたかったらしいから、一石二鳥じゃね?」

へらへらと笑う少女を改めてみると・・・やはり子供。当たり前だ。まだ13歳、中学生なのだから。

「・・・そういえばさあ、その口調は誰のもん? 周りの人ってことは志牛さん・・・はねえから弟の鷺^{しづ}さんか鶴^{つぐみ}さん?」

「いや、シグだ。ボクは5年間シグと暮らしている。その前まではカツミのところに預けられていた」

その言葉に、蟹と双汰は目を見開いた。

あの温厚な志牛が、こんな喋り方だったとは・・・想像がつかない。

「ふふ・・・帰ったらシグにいつぱいなでなでしてもらった

「
『・・・・・・・・・・』

つきつきとテンションがあがるキッドに、はあと二人は溜息をつく。

「ペットに成り下がってるな・・」
「うん・・」

他星座の1コマ

射手座 牡羊座 魚座

「ど、ち、ら、に、し、よ、う、か、な・・」

「お、なんかなついフリーズじゃん、弓壺^{ゆみひと}」

「あ、羊一^{ひつ}・・。いま氷魚ちゃんと選択中なんだ」

『そうなんです』

「へえ、なんの？この2つの箱の中に何か入ってるわけ？」

『そうです。羊一さんの「ヘッドホン」とコウモリの羽が入ってます』

「怖ええよ！！つーか俺のヘッドホン？！どおりで昨日からないと！！」

「羊ちゃん五月蠅い。俺たちコウモリの羽狙ってるんだからさ」

『一世一代の賭けです。部外者はお下がりを』
「んじゃあ返せ！！オマケなら俺の私物返せよ！！」

5話 蟹座と双子座と「セン」の巻き（後書き）

何故か力がいってるところは回想部分。

どうも女の子キャラを可愛く書けない。だれかコツを

次回もまた宜しくお願いします。

6話「君に歌を贈りたい」

乙女座の巻き（1）（前書き）

新しい話になりました。

6話「君に歌を贈りたい」

乙女座の巻き（1）

「琴の音色？」

蟹はいぶかしげに首を傾げたが、氷魚はいつもの無表情はなく、こくこくと力いっぱい頷いた。

琴の音色。現在噂になっている「行方不明事件」の話だ。

7話 君に歌を贈りたい 序編

最近多発している行方不明事件。

被害者は全て女に限り、数日したら記憶をなくして帰ってくるというなんとも不思議な事件。なんでも事件前は美しい琴の音色が流れるらしい。

被害者の女性はストレスが解消していたり、肌が綺麗になって帰ってくるという。芸術感覚もアップしていて、ある鬼嫁の若い主婦は清楚な妻と変貌をとげたらしい。

「琴の音色にさらわれたい」などと嘆く女性もいるという。

「・・・それっていいことじゃないか」

『女のできだよ』

ムカブン、と怒る幼い少女に、蟹は微苦笑した。

「そつだよ、君がさらわれて戻ってくる確証がどこからくる?!」

「・・・蠍王、いつからそこに」

ここはリビングなのでいついてもおかしくないが、まったく気配がなかった。

蠍王は蟹の隣のイスへと腰を下ろし、ふ、と笑う。

「まあとにかく戻ってくるという確証があつたとしても2日3日もいないとなると・・・俺は、俺は一体何を我慢すればいいんだ?!」

「知らん」

胸の動悸をおさえるように呻く男に、蟹は若干引く。

この男とはまだたったの2年ほどの付き合いだ。12星座の中ではまだまだ浅い方にあたる。

「・・・蠍王・・・少し乙斐いじめるのところに行ってくる」

「ああ、うん。気をつけて」

すこし残念そうに目を伏せながらも、蠍王は笑って見送ってくれた。

【1】

「いらっしやい、蟹さん、氷魚ちゃん」

あでやかな笑顔で迎えてくれたのは乙斐。

蟹は「どうも」と笑い返し、氷魚の手をひきながら家へと邪魔

した。

すでにキッドも到着していて、これで全員そろったということになる。

「これで全員だな」

室内でもネコミミ帽子をかぶったキッドが言う。

「そうですね。しかし・・・12星座の女の子がたった4人なんて少なすぎますよねえ」

『たしかに。男8人とか多すぎだろ。ふざーけんなっ』

「ひーちゃん、だんだん蠍王に似て口悪くなってきたね」

そう、12星座の中で女性なのはこの4人だけだ。

華は多いほうがいいが何故かまわりは男の方が多いのだ。

「まあたしかに星座の起源であるご先祖様たちも男の人が多いですし。」

『むっ・・・ふこうへい・・・』

そんなこんなで女子水入らずの談話をしていたとき、ふと、キッドが言った。

「そういえばこの頃、「女神」と「星座」限定の行方不明事件が多発してるってな。今少し前の含めて被害は10人超えしたとか」

「・・・女神」と「星座」・・・限定？それは初耳だな」

蟹が驚いて氷魚を見つめると、彼女もこくりと頷く。

「ああ。女神は4人被害にあってる。しかもその女神は大物ばっか

だぜ？

「ギリシア出身」の女神では戦の女神としていられている6代目の「アテナ」。

「ケルト出身」の女神では月の女神である8代目「アリアンロッド」。

「インド出身」の女神では学問の神の5代目「サラスバティー」・弁財天だな。

「メソポタミア出身」は豊穡の女神の10代目「イシュタル」だ。

「

出身は起源である「神々」の神話のことだ。
ちなみに女神は怖い女性が多いのだ。

「・・・それはすごい・・・ビップばかりだ」

「全員、名のある有名な女神ですね。インターネットで調べればほんと出てくるような人達ばかりですね」

現代化とは素晴らしいが夢がなくなる。

『つーか犯人見つかったら八つ裂きにされるんじゃない？』

「言葉遣いが悪いぞ、ひーちゃん」

そういいながら、蟹もその意見には頷けた。

「アテナ」は戦の女神。美しいがその気性は荒く、激しく、プライドが高い。そして彼女の父親である「大神」^{ゼウス}の反応もどうなるだろうか。

^{サラスバティー}

「弁財天」^{ブラフマー}にいたっては彼女が、というより夫であり三神一体のうちの1人「梵天」^{ほんにん}が激怒するであろう。何せ妻に引かれるぐらい彼女にベタ惚れなのである。

「まあ自業自得ですよね」

そういつて紅茶を啜る乙妻もすこし酷い気がする。が、世界は甘くないのだ。

「でも、「神」はややこしいな。「初代」が婚姻していたら次代もその子孫にあたる者と結婚しなければならない」

神の間の婚姻は愛が無い場合が多い。

何故血が途絶えないのかが不思議なくらい、よくできた構造になっているのだ。

「そう考えると「星座」にも似たような状況がありますよ？特に「神々・英雄」が機嫌とされる星座は。例を挙げるのなら「ペルセウス座」と「アンドロメダ座」ですね。あの2人の「初代」は婚姻していますから。でも「動物」星座や「神器・呪具」の星座ではありませんね」

動物星座は12星座の割合の中では一番多い。（牡羊座・牡牛座・蟹座・獅子座・蠍座・山羊座・魚座）

神器・呪具星座は天秤座・水瓶座（どちらも神器）
そして神々・英雄星座は双子座・乙女座となる。

「ん・・・？なら乙妻もそうなのか？」

その場の空気が、凍ったような気がした。
1人の女性によって。

他の星座の1コマ

IN 天秤座 双子座 水瓶座

「（チリンチリン）あ、双汰邪魔邪魔ー」

「へ？ぐえっ！！（自転車に轢かれた）」

「・・・だから言ったのに（乗ったまま）」

「痛い！どけ！水祁兄ミナキにい~~~~！！」

「・・・どいてやれ、天そら」

「へいへーい」

「天そら、双汰そら。そこに行きたいところはあるか？」

「銭湯！」

「・・・わかった、行こうか」

6話「君に歌を贈りたい」

乙女座の巻き(1)(後書き)

久々の更新です。 亀更新で申し訳ありません；

12人も登場人物がいて相変わらず意味不明です。

続 乙女座の巻き(2)

「え？」

「・・・」

キツドの疑問に、蟹は首をかしげ、乙妻は笑顔のまま硬直した。それに気付かず、意外に空気が読めないキツドは続けた。

6話 君に歌を贈りたい 前編

「星座になった起源に「神々・英雄」が関係していると普通の星座みたいに親から子供への継承伝達はされないだろ？」

だから乙妻は半分「神族」だ」

またここでやっかいなことに。

そう、星座で「神々・英雄」が起源となって誕生した星座はたいてい神から生まれる。

乙妻 乙女座は「ギリシア出身」の豊穡の女神「ペルセポネ」であり、数多い「大神^{ゼウス}」の娘のうちの1人。だから乙妻の母親は豊穡の神である4代目「デメテル」という女神だ。(ペルセポネの母親説は本によって違いがあります)

ちなみに神は子供の数を調節できる。

でないと血が途切れてしまうからだ。

乙妻の場合は姉妹が上に1人・下に1人いる。姉が5代目「デメテル」の名を継ぎ、自分が「ペルセポネ」と乙女座の名を継ぎ、妹

があぶれた役の「予備」。

あぶれた役、というのは、例として初代にならって結婚した夫婦がいるでしょう。そうしたら子供達も同じようにするため、また継承された子供同士を結婚させなければならぬ。

そういったとき、普通に考えてしまえば兄妹同士での血縁結婚になつてしまう。別に悪くは無いが何度も続けるのはさすがに血が濃くなりすぎて生態系がおかしくなってしまうのだ。

だからここで「予備」が発生する。

・非常にわかりにくいシステムだが結果的には大丈夫というところをわかってほしい。

「で、だ。ここからが本題」

上記の説明を長々と説明したキッドはコホンと咳払いをする。

「乙妻は今代の「ペルセポネ」。初代ペルセポネはたしか冥界の王、ハデスの奥さんになった。だから歴代の「ペルセポネ」はみんなそうだ」

ちなみに、それぞれの神話で頂点に立ったり力の強い男性型の神は「初代」から変わることはないという。例外として初代が殺されたインド出身の「梵天」^{ブラフマー}や北欧出身の「ロキ」やエジプト出身の「ラー」などらは2代目だが、ほかの主な「神」は初代のままである。

そして例を出すと、ギリシア神話の中ではオリュンポス12神といわれる12人の神のうち、序列3位以内の神「ゼウス」・「ハデス」・「ポセイドン」は初代から変わらないのだ。

「ふ・ふふ・見た目だけ若作りしたようなじじいのところになんか嫁ぎたくないですよ」

力を込めたせいで、ティーカップが砕けた。すごい握力だな。まあ結果的にその妻にあたる「ペルセポネ」の名を受け継ぐ者はハデスに嫁がなくてはならない掟がある。

「え・じゃあ乙斐、冥王に嫁ぐの？」

「嫁ぎませんよ」

ぷいつ、と可愛らしく顔を逸らして乙斐は長い髪を揺らした。

「小さい頃は、仕方ないと思ってたんですよ。

初代の「ペルセポネ」は無理やり妻にされた記録がありますから、また同じような繰り返しになったら困るということで、「ペルセポネ」の名を受け継ぐ少女は10も満たないうちに冥界に送られます。他人と恋をしないように、疑問をもたないように」

「恋愛の自由もないのかあ・残酷な政略結婚だな」

考えられない、とでもいうようにキッドは肩を竦め、嫌悪感をあらわにする。

「ん？じゃあ何故乙斐はここにいる？その話しが本当なら、冥界にいるはずだ」

「逃げたに決まってるでしょう？よわい年齢9歳ながらよく逃げ切ったもんです。……まあ、あいつのおかげなんですけどね・」

『あいつ？』

氷魚はクッキーを貪り食いながら首をかしげた。口の端からぼろぼろと欠片がこぼれおちているがしったことではないらしい。

「ええ」

乙妻は少し頬を染めながら頷く。

「私が冥界に入った後、追っかけてきて、私を説得して外の世界に戻してくれた男の子ですよ」

「うお、かつちよええな、その人。ん？でもなんでだろ？乙妻サンのことすきだったのか？」

キッドは恋愛話より男の勇士のほうに目をキラキラと輝かせている。彼女らしいといえばらしい。

「いいえ、ただの良心だと思いますよ。アレは馬鹿です。きっと私がかわいそうにおもえたんじゃないですか？正義感も溢れるヴァカですし」

酷い言いようだ、馬鹿を二回もいったぞ。二回目は馬鹿ではなくヴァカといった。

「ん・・・？でもそいつの話を聞く限り・・・なんかしってるような・・・」

「獅貴です」

「まじかア！！」

蟹が疑問を持ち、キッドが叫ぶ。同類に見えて対照的だ。

乙妻は微笑み、氷魚の汚れた口周りをふいてやりながら続きを話した。

「戻って来れなくなるんだぞ？」ってすごい形相で言いましてね。

その頃から有名だった獅貴は付き人の人達を見事な演技で騙して私を連れ戻しました。

お陰で私はこうしてここにいますが、獅貴は「ハデス」を敵に回した・・地下神殿に住む神なので会うことはないとおもいますが、うらまれているでしょうねえ」

「なんつーメロドラマ・・」

しょうさん あたい
「称賛に価しますね」

そういつて菓子を食べる氷魚以外の3人は笑い合ったが、ここであらぬ介入。

「と、いうことは、あなたが「乙女座」ですか？」

柔らかな、中性的な青年の声。

「そうです・・・よ・・・？」

「ん？」と首をかしげて振り向くと、金色の輪を頭に装着している、栗毛色の髪色の青年が佇んでいた。
手には小さな琴がある。

『誰?!?!』

乙女の部屋に!とは誰も思わないが、不審人物に女性陣は声を上げた。

青年はあわあわとうろたえ、最終的には土下座をするような形で額を床にこすりつける。

「僕の名前はローフェ。15代目「オルフェイス」にして「琴座」

の名も継いでいます」

「・・・その琴・・・もしかして、今までの行方不明事件・・・あなたが犯人？」

「そうです」

即答した「犯人」。だが、全員無言だった。

そして、蟹^{カイ}が重く息を吐いた。

「・・・ああ・・・なんで気付かなかったんだろう。」「琴の音色で人を誘う」って・・・そんなことできるの琴座だけだったね・・・」

「歴代の「オルフェイス」は初代と同じく「音楽科兼詩人」だもんなア」

「オルフェイス」はギリシア出身。種族は「人間」であり神に愛された「人間」といつてもいい。

彼が奏でる琴の音色は神も獣も耳を傾け、激しい川の流れさえ止めてしまう威力がある。

しかも今代は美容的にもいいらしい。

『そんな人がいつるちゃんになんの用なの？』

氷魚の問いを見て、ローフェは苦笑った。

「・・・乙女座のあなたにお願いしたい・・・」

ごくりと、ローフェは唾を呑み込み、乙斐を見つめた。

「僕と冥界に行ってください!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え』

女性陣、絶句。

続く

他星座の日常

I N 牡牛座 獅子座 蠍座 水瓶座

「まず、わたしは欠番という扱いで。少し書斎整理するので静かにお願いしますね」

「まあ志牛^{しぐ}さんとは相性が合わないってっただけで嫌いじゃないしな」

「そうだね。でも君はきらいだよ獅貴君」

「蠍^{さそり}っ…てめエいきなり！」

「俺は嫌いではない。ただ…憎い（ボソッ）」

「水瓶^{みずがめ}…！それ嫌いよりタチ悪くねえか？！」

「安心しろ。蠍王^{かつみ}には殺意しか感じない」

「俺と同意権だねー」

「だあああつ！やめろよ！日常がメインだぜ？この話し！」
『知るか（水瓶座・蠍座）』
「てめえらっ！！（獅子座）」
「うるせエ！！静かにしてろっていったろ！！（牡牛座）」
『ビクッ！！・・・スイマセン（水瓶座・蠍・獅子）』
「・・・静かにお願いしますね？（につこり）」

続 乙女座の巻き(2) (後書き)

妙な続き方です・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903h/>

12星座の皆様

2010年12月23日14時49分発行